

令和4年度 第2回安曇野市博物館協議会 会議概要

1	会議名	令和4年度 第2回安曇野市博物館協議会
2	日時	令和4年10月4日 午前 10時00分から午後0時00分まで
3	会場	豊科交流学習センターきぼう 多目的交流ホール
4	出席者	野口委員、百瀬委員、森本委員、宇田川委員、伊藤委員、金井委員、 笹本委員、古川委員、城戸委員、小口委員
5	事務局出席者	矢口教育部長、山下文化課長、豊科郷土博物館兼穂高郷土資料館原館長、 豊科近代美術館清澤館長、田淵行男記念館兼飯沼飛行士記念館中田館長、 高橋節郎記念美術館宮澤館長、貞享義民記念館寺島館長、臼井吉見文学館 平沢館長、逸見博物館担当係長、三澤文化課長補佐兼文化振 興担当係長、 幅博物館担当主査、塩原文化振興担当主査、曾根原文化振興担当主事 穂高交流学習センターみらい兼中央図書館宮澤館長
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	2人

協 議 事 項 等

【協議事項】

【会議概要】

1 開 会

2 あいさつ

3 報告・協議

●学校との連携について

(会長) あづみの学校ミュージアムや、ちくに生きものみらい基金など、安曇野市にとって誇るべきことである。一方、博物館美術館の職員の数について、少人数で、しかも正規職員がほとんどいない状況の中でこれだけやっている事実。そういったことを踏まえ、質問・意見をいただきたい。

(委員) 学校に勤務していた当時、学校ミュージアムを経験し子ども達と楽しんだ。ちくに生きものみらい基金についても、あづみの公園で10年くらいサポーターをやっているの、バスに乗ってきた子ども達を案内した。子どもたちにとっていい取り組みだと思う。その中で、1つお願いしたいことが、豊かな自然を学ぶという中で、植物の学芸員はいるが、動物の学芸員は確かいないため、ぜひそのような方を採用したら、もっと広がっていくのではと思う。色々体験はできるが、それを深める場、市民が学べる場が少ないと思っている。

(会長) 職員の数が圧倒的に少なく、ほとんど非常勤。学芸員体制をしっかりと、動物のような自然に関係する者が欲しい。観察会をした子ども達が研究者になることが結構増えている。今後とも進めていくようにしたい。

(委員) 小中学校の総合学習、高校についても探究科が増えてきている。テーマだけでも非常に幅広い分野であった。高校に行くと住んでいる地域から活動範囲も広くなり、色々なことが調べられるようになる中で、小中学生の時に住んでいた地域の博物館や資料館でどういった調べ学習をし、どう興味を持ったということが基礎になり、高校の課題探究につながるのではと実感した。学校との連携に、高校生たちも視野に入れてほしい。それについて対応できる学芸員が揃っているから、ぜひそこまでつなげてほしい。

(会長) 生涯学習を通じて、興味に対する誇りとか思いがどのくらい募ってくるかが大事である。その意味では小中学校から故郷をしっかりみて歩くような動きが取ればいい。そのためには、教育委員会の各学校との連携を非常に密にしていかなければいけない。一方、正直高校は難しい。進学校ではそんな暇があるか疑問。しかし、高校にもきちんと働きかけができるような形を持っていきたいと思う。

(委員) 高齢者、一般市民向けの勉強会を開くのはどうか。人手がない中で大変だと思うが、我々にはこういう学校と連携した活動の情報や機会がほとんどない。学芸員、館の関係者、あるいは市の職員の方は忙しいのなら、地域の研究者や、学校の先生を退職された方を有効に使うのはどうか。または大学の先生も良いと思うが、地域で博物館ということにこだわらず、内外から講師をお願いして学習を深めていくということを提案したい。

(会長) 資料から博物館の講演がどのように行われているか分かる。色々なところから人を集め、なおかつ職員たちが頑張っている。他館の人たちを呼ぶような場合は、自分たちでやる以上に、人との関係をつくってお迎えし、準備から色々あり逆に多忙になる。呼べば簡単にできるというものではない。

安曇野市誌作っている。市誌をつくることは故郷に対し、きちんとした歴史の認識をしていこうということ。しかし、退職した方を含めて、研究者がほとんどいない。未来を作っていくために、若くてやる気のある人の中に入れていくべき。

(委員) 総合的な学習の時間の取り扱い方が小中学校では若干違うところがある。小学校の場合、学級担任の興味関心にあることが大きい。小学校については、継続的に同じような活動が続くかどうかは未知数である。中学校は、毎年同じ学年が決まった形で行うことが多い。博物館等と連携を取るなら、中学校のほうが継続的には動きやすい。例えば小学校で、6年生は必ず市外の県立歴史館、信州新町の化石博物館に行く。市内の施設に行くことに価値があるということになれば、年間行事や教科の学習活動の中に位置づけたりできる。たとえば、美術館等も、鑑賞、図工の授業に位置づけるなど、さらに活動を広げることができる。しかしそこで課題になってくるのは、児童生徒の輸送費用の問題。市バスを使うケースも多々あるが、これ以上拡張できるのかどうか難しいだろう。あと職員の方で新しい行事を計画して実行していくことが、できたら素敵である。

(会長) 交通費という資金の問題は非常に大きなことになってくる。ちくに生きものみらい基金などの大事さを考えたい。問題点はあるが、学校側でもできるだけ協力していただける雰囲気がある。また、ここは地域を作っていこうとする団体がいくつかあったり、積極的に学校の近辺を案内してくださる人がいたりするため、そういった方と連携し前を向きたい。

(委員) 興味のきっかけ作りは、各館の学芸員が一生懸命、苦勞して分かりやすい資料を作っているが、どんなきっかけで博物館・美術館に興味を持ち訪れた人が多いのかはわからない。そこで、帰りがけに少し声をかけ、入場者に簡単なアンケートをする。何が印象に残ったか、そのキーワードなどを各館それぞれで集約をする。そうすると、文章だけではわかりにくいが見易くすることができ、様々なことを比較できる。安曇野アートラインなど、市内外から安曇野市のこういうことに意見をもらうなど、そのような簡単な言葉がけから、キーワードを拾い出していくということを意識的に日頃の業務の中でしていくことが一番近道ではないか。

(委員) 職員の配置問題。教育や文化を通して、未来へ投資するということだと思う。現状に問題を限定しないことがとても重要。未来に投資するための文化や教育機関であるので、学芸員や職員の配置に対して前向きに考える必要がある。2つ目は、一連の活動で、市の小中学生の大体何%が活動に参加しているか。数値があれば知りたい。実際どれくらい活動の現状が波及しているのかを知る尺度として興味がある。3つ目は、昨今、文科省や文化庁で、部活動の地域移行ということがしばしば語られているが、安曇野としても考えておく価値があると思う。現状で何か動きがあれば教えてほしい。

(会長) 職員配置の問題についてはきちんと未来を見据えたいので、博物館関係の人が必要ということの本協議会として要求していきたい。学校ミュージアムは各学年で6年間に一度は参加でき、素晴らしいことである。安曇野は子ども達の心を育てており、学校ミュージアムを通して、今後ともこれを続けていけたらと思う。

(事務局) 数値については、美術館博物館年間行事ガイドの利用件数を、月ごとに集計している。表を見ると例外を除いて、6月、7月が70人くらいになっている。特別展などを行わない場合、全児童生徒7,000人に対し70人くらいが動いており、月で1%、年間だと10%くらいの子供たちが家族で動くということが毎年の傾向である。課外活動については、市内に中学校が多くあるので、例えば穂高東中学校と礪山美術館、豊科北中学校と豊科近代美術館というような形であれば出来ないことはないと思う。しかし、放課後や土日に、美術館と部活動が毎回連携というのは難しい。地域の人を活用して出来ないか、ということをお話している。

(事務局) 人材も足りないため市内の学校全部はとても難しい。

(会長) 全体の10%が来ていることは、よその地域から見たら考えられないこと。しかし、安曇野の未来を作っていくのは子ども達だと考え、少しでも経験してもらおうと努力をし、何とか動こうとやりすぎてしまい、今度は職員がもたなくなるという状況になってしまうところがあるのではないかと。

(委員) 八面大王や安曇野の戦争の講座などを行っているが、参加者数を見ると、7月31日のギャラリートークは7人である。もっと参加者を増やせなかった理由は何かを考えてみてはどうか。広報を出していても知らない方が結構いるのも事実。参加者を増やせなかった理由について、ぜひ考えてもらいたい。

(会長) 先日、大分県立美術館のギャラリートークを聞いたが、4人であった。今はコロナで人数制限をされており、この時期に関して言えば、少人数の方が安全である。参加希望者が多く締め切り前になり、講義の様子を映像として流すという話になった。YouTubeを使った対応もできるが、映像の処理をする専門家がほとんどおらず、映像の部署などの協力体制もできてない。ギャラリートークは面白いものであるので、今後どのようにしたら良いか考えたい。人材やお金に関しては相当強く言っている。やっていくためにどれくらいの努力ができるのかが大切。

(委員) 学校と博物館ということだけでやっていると、きつい部分が多くある。例えば、予算や安全面。それで友の会組織を活用した。友の会組織であると、参加者、会員の負担、責任でやっていける。職員からしてみると、基本的には別の団体という形で出来る。

豊科郷土博物館友の会で子どもたちを対象とした「宝探し部」という安曇野の魅力を現地で見学して楽しむ会を、5年前に立ち上げた。学校の先生、各館や市の職員に呼びかけて、指導者のなところも含めた組織の核を作った。対象は子どもたち+保護者という形で始めて、1年目は申込みも少なく、結構厳しかった。今年5年目になり、あっという間に定員に達してしまう状況。結果として、25組の保護者、子どもたち、小学生を中心に市外含め70人の会員となった。年間で延べ500名を超える参加者がある。なぜそういうことが出来ているのかというと、出発は厳しいがある程度のところになると、学校や地域で、保護者が「あれは面白い」などと話をし、広まっていると思う。そのように、職員以外のところに任せることは少し時間がかかるかもしれないが、博物館・美術館のために何かしてくれる方をお願いしてみる。そこから出発してみてはどうか。

2つ目は、子供向けの会を開いたときに、30代、40代の郷土の学習をあまり行ってこなかった世代の親が一番いいターゲットだと思う。子どもたちよりも、特にお父さんたちが感動し喜び、たくさん参加している。安曇野にはこんなことがある、面白い、子どもにもそういうことをさせたいと。ギャラリートークについても、機会と内容によっては、人づてで広がっていく可能性はあると思う。委員の方々はぜひ子どもたちを喜ばせる側へ、各館長たちも色々頑張

っておられるためエールを贈りまとめとする。

●4年度事業の進捗状況および、5年度事業の構想について、

(委員) 豊科近代美術館で行われた土門拳展で、ボランティアとして監視員をしたそこでの経験を踏まえての提案。写真を撮る権利も入場料の中に入っていると思う。著作権についても、断らない著作権者もいると思う。光により作品が変色し劣化するからダメと言うが、今のスマートフォンはフラッシュをたかなくても充分撮れる。なにより、入館者は写真を撮りたいと思う。撮ることにより、作品と自分とが一体化出来たり、作品に自分が入ったりすることが出来る。あるいは、撮ることにより作家と何かを共有したり、会話をしたりもできる。持ち帰り、もう一度作品を味わうこともできる。そして、また見に行きたいと思う。そのようなことをぜひお考えいただきたい。著作権に関しては様々なハードルがあるようだが、コロナ禍で来館者が多くないときに、クリアしていくような手立てをすることは出来ないか。

入館者の人数が記録されているが、年齢層の把握はしているのか。小中学生に美術館・博物館を鑑賞して学習することは非常に重要なことだが、実際お越しになる中年以上の方、老人を対象にした何かを打ち出しているか。

多くの方は作品を見る前に下にある説明書きを丁寧に読み、それからじっくり作品を見る。説明書きが下から1メートルもない低いところに貼ってあったため、全員が腰をかがめて読んでいた。私は土門拳展で監視員をしていたとき、10人以上から上に掲示してほしいと言われた。すぐ美術館に希望を出したが直らなかった。来館者の希望どおりに工夫して欲しい。

毎年200人が市立の美術館・博物館に来ていただく方法がある。受講生が200人いる朗人大学に、「美術館・博物館を訪れる」という講座を持つことである。そして、場合によっては、作品の鑑賞の仕方という講義をしてもらう。そして、受講生は年間2つ以上の博物館に参加してレポートを出していただく。ぜひ提案したい。

(事務局) 日展はフラッシュなしなら写真は可能であった。これは、日展の考え方があって、日展の作品を広めるためには撮っていただくことが大事という考えに基づいてのものであった。土門拳展は著作権もあり、巡回展であったため、当館だけが撮影可能というのは難しい。

説明書きの位置について、貴重な意見とし受け止めた。腰をかがめられないが、遠くて文字が小さく読めないということについて、文字の大きさも含めキャプションの研究をしていきたい。当館は写真撮影不可だが、これは著作権の問題より、作品を借りている立場の問題。作品の所有者にも許可を求めないといけないし、撮影可能な作品と難しい作品が混ざってしまうとまた難しい。しかし、所有者に、館としてこういった方向で行きたいと、意見を伺うことはやぶさかではないと思っている。

(会長) 自分たちのものは写真撮影可能にするが、借りるときは先方のものは基本的に不可であるし、撮影できる作品とそうではない作品が混ざっていると難しい。また、美術愛好者は写真をとっていること自体、音など様々なことを気にして嫌がる。

(委員) 原則として著作権保護期間は70年であるが、例えば、ルーマニアの彫刻家コンスタンティン・ブランクーシは1957年没でまだ著作権保護期間である。その作品は、豊田市美術館は撮影可、一方、福岡市美術館は不可というように、館によって様々な判断がある。複製権の問題もある。利益を出すための使用は禁じられているし、軽率に複製して原作のイメージを歪めてしまうことも大変問題である。現場それぞれの都合、所蔵者の関係、複雑な要素があるから一概には言えないが、例えば、東京国立近代美術館のやり方は一つ手だと思ふ。あらかじめ撮影希望の方を聞き、館のルールに則り、自由に撮影している。

(会長) 権利について、世界各国で対応も違う。入場券を買ったことイコール写真を撮れるということではない。今後色々な考え方があり、所蔵者の意見もあるからご理解いただきたい。

(委員) 豊科郷土博物館は出前展示ということで、色々なところで拝見でき、興味を持たせるきっかけになっていると感じた。博物館は保管するだけでなく、いかに様々な所に情報を発信

するか、ということで提案がある。出前展示に対し、今度は「お尋ね展示」はどうか。何かの専門家というわけではないが、知恵を持っている人、漬物の知恵とか色んな知恵とか、ものすごくためになることを持っている方がいる。そういう老人の集まる場で、いい意味での情報発信のネタにして、生活実感に基づいた情報をトレードしていくのはどうか。知恵を持つ方が、知恵や情報をしゃべらないうちに他界してしまってもったいない。

(事務局) 穂高デイサービスセンターへ「昔の民具を使った回想法」ということで、魔法瓶などの資料をたくさん持って行った。最初は全然しゃべらなかつた人たちが、だんだん会話が盛り上がっていき、しゃべり出して非常に良かった。要望があれば適宜回りたい。

(会長) 回想法については着目され、色々なことが行われている。

(委員) 特別展はよく行くが、常設展は行くたび同じであるため、あまり行かない。企画展やイベントなど、職員にとっては少し大変だと思うが、仕事ならある程度は我慢してやっていただくのは仕方ないと思う。全般的に宣伝活動が非常に下手である。ポスターを掲示しているだけでは市民の方に周知を徹底できない。安いチラシでもいいから、図書館など、市民が大勢来るような場所に置くべき。友の会や、市内の有識者そういった方をもっと活用するべき。お金を稼ぐということにもう少し食欲に、稼ぐ方法を検討して頂きたい。この協議会について、毎月、会を開いてはどうか。年に2,3回じゃ大して役に立てない。ぜひ、もっと多くの人々の意見を聞き、館や文化の発展のためにこの協議会を使っていたらと思う。

(会長) 毎月、会議があっても出席することはできない。広報がなぜ届かないのか。実は、一番広報しているのは市民で、SNSを通じて拡散している。これらの努力で広報を出すより、仲間内であれば、あっという間に広がる。その際に必要になってくるのが写真。市の広報をやると同時に、どうすれば市民がSNSにアップしてくれるかを考えるべき。インスタグラムをはじめとして、毎日このような講座をやっているなどと、委員の方から広報していくのはどうか。次に、学校は儲けの為ではなく、教育の為であるため、お金をかけてもマイナスではない。公的な博物館もお金の為ではなく、文化を向上していくために何ができるかが大切である。一人でも多くの方に来てもらえるように、招待券を配り発信してもらうようにする。これが広報に繋がる。今後10年、20年、100年先に、博物館を通じて文化が未来を作っていくことについて、考えていただきたい。

●その他

(事務局) 新市立博物館の関係について、平成27年度に新市立博物館構想を策定して7年経った。その後、社会情勢も大分変わり、まだ具体的なことを考えるのは先になると思う。安曇野市ならではのテーマを設定しながら、考えていきたい。財源確保の問題、候補地選定 収蔵庫の問題もあるため、研究し進めていくための委員会も来年度から立ち上げたい。

5 その他

6 閉 会 (文化課長)

※会議概要は、原則として公開します。

※会議を非公開又は一部非公開とした場合は、その理由を記載してください。